

8. 前立腺癌骨転移例における骨シンチグラフィの意義 ——特に経過観察における単純X線写真との比較——

日高 啓 石野 洋一 仲山 親
中田 肇 (産業医大・放)
杉田 篤生 (同・泌)

昭和55年5月より昭和61年7月まで、病理組織学的に前立腺癌と診断され、 ^{99m}Tc -MDPによる骨シンチグラフィが施行された35例を対象とした。

骨転移例は20例(57%)で、全て骨シンチグラフィは陽性であった。転移部位は単純X線写真では造骨性変化を示すものが多く、従来の報告とほぼ一致した。

さらに経過観察のため再検査された14例に対し、単純X線写真や生化学データと対比し、骨シンチグラフィによる経過観察の意義について検討した。

9. 単腎患者における ^{99m}Tc -DTPAによるGFRの算出

原 正史 高木 善和 古閑 幸則
吉岡 仙弥 古嶋 昭博 広田 嘉久
高橋 睦正 (熊本大・放)
小島龍太郎 塩津 昭平 (熊本通信病院・放)
平山 英雄 (熊本大・泌)

片腎摘出後の10例について ^{99m}Tc -DTPAを用いてGATESの方法によりGFRを算出した。その結果Data収集の最適のTime Intervalは、2分から3分であり、Renal ROIの大きさは、等高線ROIにて作製した腎の形を保つ最大のROIよりもCut-off levelで5%縮小した大きさのときに最大の相関係数を示した。また、Background ROIの形は腎下外側においたSemilunarのROIが最適であったが、下腹部正中部に設定した正方形のROIも高い相関を示した。この方法は、個々の腎機能を知る上で、簡便で有用な方法と思われた。

10. 腎ファーストパスによるFunctional Imageを用いた高血圧症の腎循環の検討

石橋 正敏 森田誠一郎 梅崎 典良
大竹 久 (久留米大・放)
矢野 潔 (聖マリア短大)

今回、われわれは Tc - $^{99m}\text{DTPA}$ 急速ボーラス注入(約2ml/sec)による腎動態機能検査を行い、腎第1回循環の血流のFunctional Imageを作成した。対象は20例で、腎血管性高血圧症、本態性高血圧症および健常者であった。年齢は18歳より58歳で、平均42.5歳であった。方法は、RI急速ボーラス注入後、1秒1フレーム1分間、20秒1フレーム29分間、計30分間、データを収集した。データをプレイバックし、RI注入後1分間のデータだけを使用した。その結果、腎血管性高血圧症の治療前後の変化、本態性高血圧症の薬物(Captopril)負荷による腎循環への影響などの情報を、1枚のFunctional Imageにて得ることが可能となった。

11. 負荷心筋ECTによる有側副血行路狭心症の血行動態の分析

菰原 保幸 古閑 幸則 高木 善和
古嶋 昭博 吉岡 仙弥 原 正史
土亀 直俊 広田 嘉久 高橋 睦正
(熊本大・放)
久木山清貴 泰江 弘文 (同・循内)
早崎 和也 (済生会熊本病院・循内)
富口 静二 (国立再春荘病院・放)

有側副血行路狭心症における血行動態を分析するため、38症例を対象に負荷心筋ECTと冠動脈造影所見の検討を行った。本症ではdonor arteryの病変の有無にかかわらず、大部分の症例でCMR(collateralized myocardial region)だけでなく、DMR(donor artery's myocardial region)にも虚血巣を有した。両者の虚血度には差があり、常にCMRが高い傾向を示し、副行路の発達により両者は接近し改善を認めたが、消失することはなかった。このことはdonor arteryの供血能の限界、副行路によるsteal現象、DMRの虚血の発生に示唆を与えるほか、虚血の消失には副行路の発達だけでなくdonor arteryの代償性拡張が必要であることを示すと推察された。